ダイジェスト版

# 野田村のみなさまの暮らしとお仕事に関するアンケート調査

## 野田村のみなさまへ

いつもお世話になっております。弘前大学人文社会科学部の李永俊です。

まず、東日本大震災で被害に見舞われた皆さまへ心からお見舞い申し上げます。

この度、弘前大学とチーム北リアスが野田村役場のご協力をいただき、2013年、2017年に続き、3回目の『野田村のみなさまの暮らしとお仕事に関するアンケート調査』を2020年8月に実施しました。その結果をまとめ、調査報告書を発刊すると共に、このダイジェスト版は、調査報告書の主な結果を住民の皆さまに分かりやすく紹介できればと思い、作成したものです。

東日本大震災のような未曾有の大規模災害からの復興は、今まで経験したことのない多くの困難をともなうものです。復興過程でなにより優先しなければならないのは、言うまでもなく住民の皆さまの日々の暮らしを建て直すことであります。復興のための復興ではなく、住民の生活の質（Quality of life）を重視した復興を成し遂げるためには、住民一人一人がどのような経済的、社会的被害に見舞われていたのか、時間の経過と共に現在はどのように生活を営んでいるのか、そしてどのような希望や将来への夢を抱いているのかを丹念に把握する必要があります。この調査は、そのような住民の暮らしと生活に関する変化と現状を正確に把握することの一助になることを願い実施したものです。

本調査では、609名の住民の皆様から貴重なご回答をいただくことができました。また、今回の調査を実施するにあたり、野田村役場の全面的な協力をいただきました。野田村住民の皆様と関係機関のご協力に心から感謝申し上げます。

調査グループを代表して 弘前大学　李永俊

# 震災10年目の生活実態

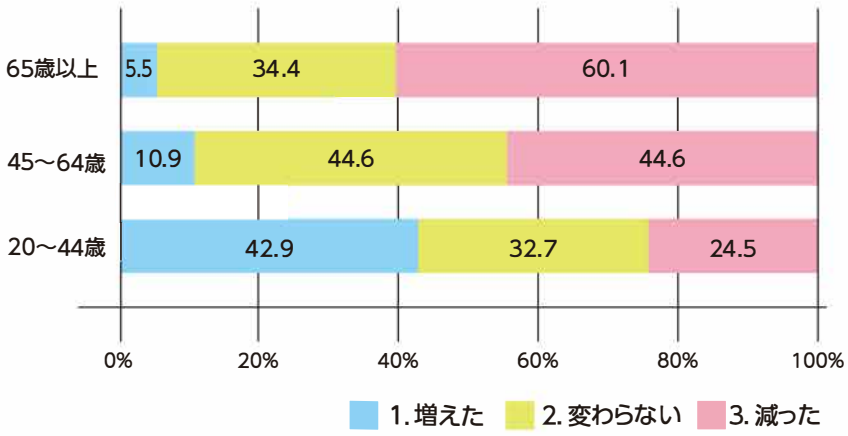
ここでは、アンケート調査から見えた野田村に住む人々の収入と仕事、そして人間関係や主観的な復興感を、データを通して概観した結果を紹介します。経済活動の代表的な指標である収入の変化については、20～44歳の青年層では、収入が増えた人が4割を超えているのに対し、中年層では10.9%、高齢者層では5.5%で、年齢階級別に大きな差があることがわかりました。青年層が活発に経済活動を行っているのに対し、高齢者層で収入、支出、貯蓄共に減少した人が多く、高齢者層への配慮が求められていることが明らかになりました。

東日本大震災による住まいの被災有無による支出と貯蓄の変化の差をみると、支出においては、大きな差は見られませんでしたが、貯蓄においては被害があったグループで貯蓄が減ったと回答した人が68.7%に上っており、被害はなかったグループより10.8ポイント高くなっていました。住まいの再建や復旧に大きな支出が重なったことがこの結果につながっていると思われます。長期的な経済支援が欠かせないことがこの結果からうかがえます。

また、人との付き合いにおいても、若年層では地域の仲間、仕事の仲間、村外の人々共に増えている人が多いのに対し、高齢者層ではその真逆になっていました。経済活動や人との付き合いに、行動範囲なども大きく関係するので、年齢が若いほど、より活発になっていることがこの結果につながっていると思われます。ただ、高齢者層で行動範囲が狭くなった原因には、震災による住まいの移動などが影響しているものと推測されます。高齢者層においても震災以前のようなコミュニティが形成できるように、交通インフラや高齢者の移動を手助けするような支援が必要であると思われます。そして、重要な論点である震災の被害の有無による生活への影響は、概ね薄まっていることがわかりました。ただ、なかにはいまだに十分に復興していると感じられない人もいることを忘れてはならないと思います。より一層、きめ細かな支援が求められていると思われます。

（単位：%）

| | 20～44歳 | | 45～64歳 | | 65歳以上 | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| | 増えた | 減った | 増えた | 減った | 増えた | 減った |
| 家族・親せき | 16.5 | 8.7 | 5.1 | 11.1 | 9.6 | 15.3 |
| 地域の仲間 | 21.6 | 11.8 | 6.9 | 19.4 | 7.7 | 30.0 |
| 仕事の仲間 | 21.6 | 7.8 | 8.7 | 17.8 | 7.4 | 32.4 |
| 村外の人々 | 24.3 | 9.7 | 11.3 | 13.4 | 4.3 | 29.3 |



# 震災10年目の復興感

東日本大震災津波から10年。復興は、まだ完全とはいきませんが、着実に進んでいます。「あなたは、野田村の復興が、どれくらい進んでいると思いますか」という質問への回答は、「ほぼ復興した」が44%、「半分以上復興した」が42%で、2017年の調査（それぞれ19%、48%）と比べると、村の復興が進んでいると感じていることがわかります。生活の復興については、2017年と今回の調査で大きな違いはなく、おおよそ7割の人が「ほぼ復興した」と感じています。

このように復興が進んだ中、野田村は暮らしやすい村になったでしょうか。「あなたは、震災以前と比べて、野田村が暮らしやすい村になったと思いますか」――この質問への回答は次の通りでした。まず、ほぼ半分の人々は「変わらない」と思っています。そして、残る半分の人々は「（少し）暮らしやすくなった」という人と「（少し）暮らしにくくなった」という人がほぼ相半ばしています。中には自分の生活や野田村はほぼ復興したが、野田村は以前よりも暮らしにくくなったと感じている人も1割ほどいます。

では、このことと関連しているのはどのような事柄でしょうか。野田村が暮らしやすくなったと思う人、暮らしにくくなったと思う人、変わらないと思う人では何が異なるのでしょうか。下の表は、野田村が暮らしやすくなったかどうかと関連の強い上位10項目を示しています。AIC値が関連の強さを示していて、数値が小さいほど関連が強いことを表しています。

野田村が暮らしやすくなったかどうかと最も強く関連しているのは、震災の前後で地域の仲間や村外の人々との付き合いが増えたかどうかです。暮らしやすくなったと感じている人は、そうでない人と比べて、これらの付き合いが増えた割合が多くなっています。また、「心を開いて話すことができる人」や「その人のおかげで被災後の生活設計が定まったと感じられるような人」など、震災をきっかけとして重要他者との出会いを経験していることも、暮らしやすくなったと感じている人々の特徴です。震災をきっかけとして村外の人々を含む人間関係が量的にも質的にも充実していることが、野田村の暮らしやすさに大きく影響していることがわかります。

野田村には震災以降、村外からボランティアを含む大勢の人々が訪問し、村の方々との交流があちこちで芽生えました。そのような交流をどう活かし、広げていくかが重要であると思われます。

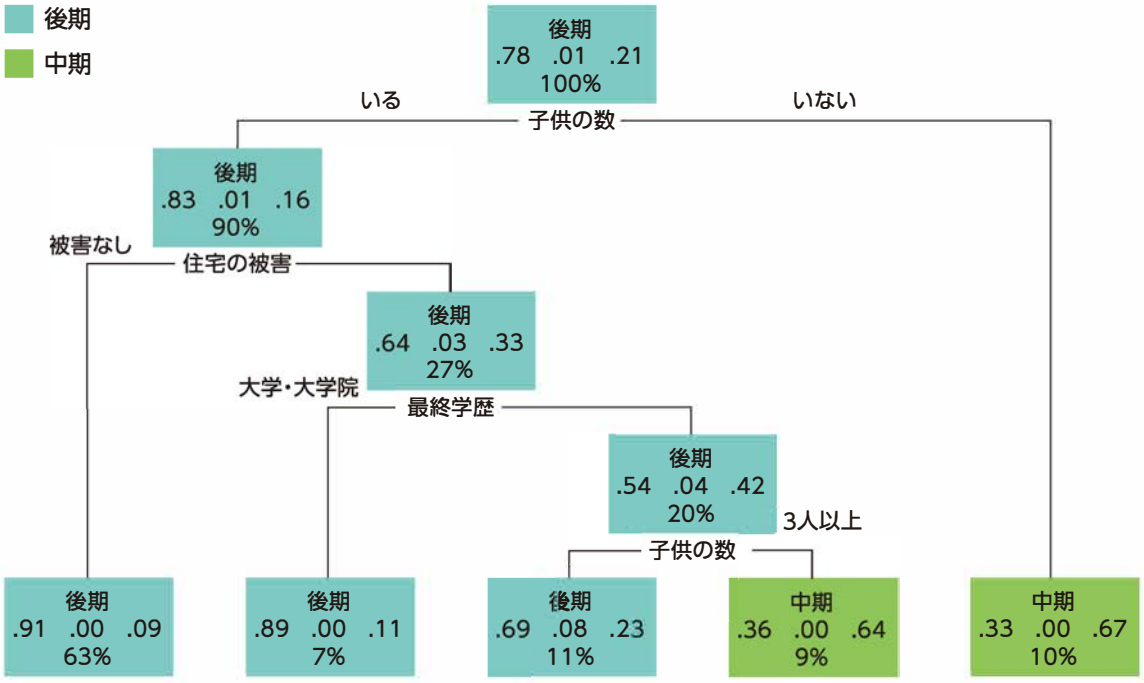
| 順位 | 項目 | AIC値 |
|---|---|---|
| 1 | 震災前後で地域の仲間との付き合いが増えた／減った | -51.03 |
| 2 | 震災前後で村外の人々との付き合いが増えた／減った | -42.3 |
| 3 | 震災前と比べて、自分の将来は明るいと感じることが増えた／減った | -30.89 |
| 4 | 震災前と比べて、元気ではつらつとしていることが増えた／減った | -30.39 |
| 5 | 震災以降、心を開いて話すことができる人との出会いがあった | -25.37 |
| 6 | 震災前後で家族・親戚との付き合いが増えた／減った | -24.93 |
| 7 | 震災以降、自分だけが頼りという気持ちが増した | -20.17 |
| 8 | 震災以降、行政への頼もしさが増した | -19.61 |
| 9 | 震災以降、その人のおかげで被災後の生活設計が定まったと感じられるような人との出会いがあった | -17.08 |
| 10 | 震災前と比べて、日常生活を楽しく送ることが増えた／減った | -16.62 |
| 11 | 震災をきっかけに同志的なつながりができた | -16.52 |
| 12 | 震災以降、ボランティアのありがたさを知った | -15.49 |
| 13 | 震災前と現在で、貯金額が増えた／減った | -14.24 |
| 14 | 震災以降、被災から立ち直るきっかけを与えてくれた人がいた | -14.18 |
| 15 | 震災前後で仕事の仲間との付き合いが増えた／減った | -12.18 |
| 16 | 震災以降、その後の人生を変える出会いがあった | -11.68 |

# 震災からの復興感と復興を感じる時期がどのように決まるか？

震災から復興したと感じるために何が必要なのか、震災からの復興を早く感じるためには何が必要なのか、について見てみましょう。

アンケートの結果から、自分の生活が復興したと感じるためには収入などの経済面の向上が必要なことが示されました。一見、当たり前の結果のように見えますが、2013年の調査では経済面よりも地域の人々とのつながりのようなものが、2017年の調査では家族のなかでの立場なども重要だと示されていました。このことから、震災の直後は人と人とのつながりを守りながら、できるだけ早く経済面を手助けするような政策が必要だと思われます。

最後に、自分の生活が復興したと感じる時期を早めるためには収入の安定と、家族の人数が減らないことが大事だということがわかりました。また、村の復興がほぼ完了したと感じる要因について、図で示してみました。一番上の箱からスタートして、箱の下の条件に当てはまる方向にたどっていくと、復興時期が中期（2014年～2017年）か後期（2018年～2020年）か、どちらになりやすいかを表しています。図で示されているように、子どもがいる人や、住宅の被害が小さかった場合、復興の時期が遅くなる傾向が示されました。被害が少ない人ほど村の復興を感じる時期が遅いというのは不思議な結果です。子どもがいたり、住宅の被害が小さかったりした人は、村と深く接しながら、村全体の復興を手助けしたのかもしれません。そのことが、村の状況をよく知るきっかけになり、ほぼ復興したと感じる時期を遅らせているのかもしれません。



# 移動性向の変化について

長期の復興において、人口の流出は復興を妨げる大きな障壁となります。東日本大震災の直前の4,835名だった野田村の人口は、約10年で13.8％減少し、4,170名（2021年1月）となっています。このような人口減少は震災前から続いている傾向で、震災によってどの程度、加速したのかを断定するのは難しいです。ただ、人口減少問題がこれからのまちづくりにおいて最大の課題であることは明らかであります。ここでは、人口減少の最大の要因の1つである人口流出に注目し、移動性向を通して人口流出を食い止めるためのヒントを明らかにします。

| | 2020年 | | 2013年 |
|---|---|---|---|
| | 実数（人） | 構成比（%） | 構成比（%） |
| 野田村に住み続けたい | 460 | 87.1 | 81.0 |
| 村外に引っ越したい | 59 | 11.2 | 12.0 |
| 一度は、村外で住んでみたいが、そのうちに帰ってきたい | 9 | 1.7 | 7.0 |
| 合　計 | 528 | 100.0 | 100.0 |

| | 2020年 | | 2013年 |
|---|---|---|---|
| | 実数（人） | 構成比（%） | 構成比（%） |
| 村内に仕事があるから | 96 | 22.0 | 3.4 |
| 野田村は、生活が便利 | 73 | 16.7 | 8.6 |
| 知り合いに囲まれて暮らしたい | 137 | 31.6 | 35.0 |
| 家族が希望している | 84 | 19.2 | 27.4 |
| 震災があったから | 8 | 1.8 | 2.0 |
| その他 | 39 | 8.9 | 23.5 |
| 合　計 | 437 | 100.0 | 100.0 |

震災から3年目の2013年の調査結果と比較すると、大きな違いとして、野田村に住み続けたいとした割合が、2013年調査結果より6.1％増えており、定住志向が強まっていることが明らかになりました。また、注目されたのは、住み続けたい理由として、「村内に仕事があるから」が2013年では3.4％に止まっていたのに対し、今回は22.0％で大幅に改善しています。復興過程において、雇用の創出が順調に進んでいることがうかがえます。他方、女性や青年層の移住希望者において、「生活が不便だから」を理由として挙げた割合が4割に上っており、青年層や女性、子育て世代に配慮したまちづくりがこれから課題であると思われます。また、震災で家族や親せきとの付き合いが減った人や個人の復興が遅れている人に、移動性向が高まっていることがわかりました。このような属性の人々へのより一層の配慮が今後の村づくりに求められていると思います。

# 新たなコミュニティづくりと世代差

震災を契機とした新たなコミュニティづくりが進む中、それに対する意識の世代差を懸念する声が、野田村の人々から多く聞かれます。ここでは、39歳以下を「若年層」、40～59歳以上を「中年層」、60歳以上を「高年層」として、地域活動への参加状況、震災後の生活や人間関係、震災後の人間関係の特徴の世代差、震災前後の日常生活の質の変化といった側面から、世代差を分析しています。

たとえば、下の図は、震災後10年ほどの間で地域のイベントや活動にどの程度参加しているかを尋ねた内の、「町内会や自治会の仕事をしていますか」という質問への世代別回答パターンを示しています。年齢層が高いほどよく参加しており、若年層の参加率は「よく参加」と「たまに参加」をあわせても3割強にとどまっています。さらに、若年層の過半数が「参加しておらず、興味もない」と回答しており、町内会や自治会の仕事への温度差が明らかといえるでしょう。

その他の分析を総合すると、若年層は、現在の生活様式において、地域の活動に参加する頻度は低いものの、震災以前よりも人間関係は広がり、日常生活の質も充実していると感じていることがうかがえました。また、若年層は、地域の行事などに興味がないわけではなく、仕事が忙しいことが参加できない理由であることも示唆されました。

さらに世代間交流をはかり新たなコミュニティづくりを促していくためには、村外の人々との交流など新たなつながりの創出や維持なども重要となることと思われます。

# 野田村の声
# ～自由回答から～

## この10年間を漢字一文字で表すと?

「まもなく東日本大震災から10年目となります。この10年を漢字一文字で表せば何になりますか。」という問いかけに、388人の方から回答がありました。表は、回答が多かった漢字の順に、10位までを示しています。

| ランク | 漢字 | 人数 |
|---|---|---|
| 1位 | 変 | 33人 |
| 2位 | 進 | 22人 |
| 3位 | 耐 | 21人 |
| 4位 | 苦 | 16人 |
| 5位 | 忍 | 15人 |
| 6位 | 絆 | 13人 |
| 7位 | 生 | 12人 |
| 8位 | 災／希 | 11人／11人 |
| 9位 | 早／忙 | 10人／10人 |
| 10位 | 復／無 | 9人／9人 |

変化や変わるというイメージの「変」が33人と圧倒的に多く、次に一般的にはやや前向きなイメージの「進」が22人と多くなっていました。他方で、それに続くのは「耐」21人、「苦」16人、「忍」15人と、ややネガティブなイメージの漢字でした。ただし、自由回答と合わせて考えると、「変」と回答した人でも、「老後が心配」などのように変わることへの不安や、「子どもの遊び場が欲しい」などのように変えてほしいことの願望などもみられ、回答には多様な意味が含まれているようでした。

ただし、一定の傾向もみられました。この回答の多かった5つの漢字について、「変」と回答した人の平均年齢は53歳であり、同様に、「進」44歳、「耐」63歳、「苦」53歳、「忍」66歳でした。やはり「進」という未来のあるイメージは、より若い人が選択する傾向があるということでしょうか。また、「変」「進」と回答した人に比べて、「耐」「苦」「忍」と回答した人は、震災によって住まいになんらかの被害をうけている人が多く含まれる傾向もみられました。高齢の方や震災による住まいへの被害を具体的に受けた方々のこの10年間の複雑な状況が想像されるところです。

漢字一文字に込められた意味を正確に推し量ることはできませんが、見えにくい住民の方々の生活の困難には、目を向けていくべきであると考えられます。

## 野田村のみなさまの暮らしとお仕事に関するアンケート調査報告書　ダイジェスト版


執筆担当者
研究代表者　李　永俊（弘前大学人文社会科学部・教授）
研究分担者　永田 素彦（京都大学人間・環境学研究科・教授）
花田 真一（弘前大学人文社会科学部・講師）
山口 恵子（東京学芸大学教育学部・教授）
牧田 大輝（京都大学人間・環境学研究科修士課程）



2021年3月
編集・発行　弘前大学特定プロジェクト教育研究センター 弘前大学人文社会科学部地域未来創生センター
〒036-8560 青森県弘前市文京町1番地 総合教育棟 2F
TEL.0172-39-3198　FAX.0172-39-3189
E-mail：irrc@hirosaki-u.ac.jp　URL http://human.cc.hirosaki-u.ac.jp/irrc/

本調査研究は、一般財団法人北海道東北地域経済総合研究所のほくとう総研地域活性化連携支援事業の助成を受けて実施したものです。この場を借りて深く御礼申し上げます。